

受験者、合格者の属性

受験者・合格者の属性に関しては、大勢としては研究の方法においても結果においても昨年度と同様の傾向にあると言えよう。

受験者数、受験者の1次及び2次の試験成績や調査書の教科目評定平均などの分布の動向が、いわゆる受験者の国立大学離れ現象との関連において注目されているが、昨年度との比較だけでは明確でないにしても数年間の推移をたどった場合、若干その傾向を認める大学と、むしろ逆の傾向の大学とがあり、全大学に一律な傾向は認めがたい。合格者の試験成績等についても、各大学の受験者の動向と連動した傾向が報告されている。

男女比については、わずかながら女子の増加傾向を認める報告がいくつかあるが、とくに文系の大学・学部が多いようである。そして、入試成績・調査書・合格率のいずれも女子の優位が明らかとなった学部もある。

出身地については、数年来の地元志向の傾向が持続されている大学と変化のない大学とがあるが、これは大学のステータス・所在地域・専攻の特殊性などが関与しているものと思われる。また、地元志向の強い女子の増減が全体の傾向に反映するものと思われる。

現役と浪人の比較に関しては、種々の角度から調査されてきている。受験者、合格者に占める現役・浪人比は大きな変化ではないが、大学・学部によって相異なる変動が報告されている。

この比もまた、浪人の少ない女子の増減と平行する性質があることを念頭において解釈されねばならないだろう。入試成績については、従来どおり1次と2次（学力検査の場合）ともに、1浪>現役>2浪の傾向を認める報告が多い。したがって合格率もまた、そのような順位となっている。また調査書の教科目評定平均と入試成績との相関についての報告は、現役の方が浪人よりも高いという点で一致している。これらの結果の解釈は、浪人群が必ずしも昨年度以前の現役群と等質でないことを考えると、単純には行えないだろう。たとえば浪人の入試成績が良いのは勉強量の多さのためではなく、リスクな志望を避けて合格の確率の高い大学を受験したためかもしれない。この点で、同一大学への2年度以上にわたる連続受験者についての調査に関心がもたれるが、前年度の不合格の全員が連続受験するのではないこと、調査大学が特殊であることに困難がある。

入学辞退者については、原因となりうる要因（学部の性質、現役か否か、出身が地元か否か、入試成績、志望順位）とその後の進路（入学大学・学部、浪人、就職等）について調査されている。非地元出身者や低い志望順位の者に辞退率が高いのは常識的にも予想されることであるが、入試成績については高い方が辞退率が高いという報告もあり、ごく上位でもっとも低いという報告もある。学部・学科による辞退率の差

は志願者の併願率と関連することを指摘する報告は、その学部・学科を卒業した後の進路（職種）の特殊性や、本人の進路決定の固さなどさ

まざまな要因をあわせて考慮する必要性を示唆しているようである。